

2. 「Do for Smile @東日本」プロジェクト (復興支援)

2.1 「Do for Smile @東日本」プロジェクト 明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム

震災から5年を迎える復興支援

震災からまもなく5年を迎える。応急仮設住宅の当初の使用期限は5年であったが、復興まちづくりの遅れに伴い、吉里吉里地区では復興住宅が一棟建設されただけで、吉里吉里学園小学部・中学部の児童・生徒の一定数は現在でも仮設住宅で生活するなど、復興が進んでいるとは言えない状況が続いている。こうしたなか、私たちの活動が今後どのような形で継続していくか、もしくは変化させていくのか、ボランティアセンターの教職員と学生が一体となって議論を進めた。

学生側は活動の振り返りとしての評価活動の必要性に気づき、「地域に寄り添った復興支援活動の行動指針～つながりを大切に」というタイトルの冊子作成に取り組んだ。これは、2015年度の「ボランティアフェンド学生チャレンジ賞」の助成を受けて進めたものである。現在の主要メンバーは2013年4月以降に大学に入学した学年であり、震災後にどのような思いと過程で活動が立ち上げられ、地域の方々の思いを受け止めながら作ってきたのか、十分に理解できているわけではなかった。この振り返りと評価活動は自らの活動の理念を再確認する作業であり、5年間という長期的な視点でとらえ直す機会となった。また、震災復興に関する学生の関与についてモデル化し、共有する取り組みとしても位置づけ、「学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会」などでつながりができた大学ボランティアセンターやそこで活動する学生にお届けすることも予定している。

教職員が中心とした企画としては、ボランティアセンターの活動の再定義を試みた。その議論から、教職員と学生が一体となって、活動を見つめる場が必要だということとなり、「東日本大震災から5年をふりかえる：『Do for Smile @東日本』プロジェクトのこれまで・これから」という会が開催された。オープニングの講演では、津波到達地点に桜の木を植えることで、震災の教訓にする活動をしているという陸前高田に関わる映画監督からお話があった。「もし、東京で大震災が起こったら、どのように自分たちの身を守れるのか真剣に考え、準備してほしい」という強いメッセージが届けられた。また、学生が大槌や陸前高田、気仙沼で住民の方々から教えていただいた「大震災時には、いち早く被災者から支援者になってほしい」という東北の方々の思いを受け止め、首都圏で震災発生を想定したさまざまな活動に取り組むこと、震災の風化を防止するために、現地のことを伝え続けていく必要性が、本センターの取り組みとして必要であることが確認された。

また、ボランティアセンターの震災以外のセクション学生と、仮設住宅における活動のコラボレーションなどの可能性も検討するなど、これまでの枠組みを前提としすぎず、創造的に活動を作っていくことが重要だと認識された。

地域の人びとをつなぐ『吉里吉里カルタ』

ボランティアセンターの大槌復興支援におけるユニークな活動の一つに吉里吉里語のアーカイブ活動がある。これは、吉里吉里語辞典の多くが震災で流失したため、制作者の家族から辞典の復刻の相談を受けたことが直接的なきっかけとなり、動き出したものである。その活動が「吉里吉里語の音声を残す必要があるのではないか」「会話の中から自然な形で録音をしていってはどうか」というように、地域住民の声と学生の気づきをきっかけに、活動が発展してきた。やがて、アーカイブ活動が直接的に生かされる方法を学生が模索する過程で、2013年秋に『吉里吉里カルタ』のアイデアが生まれた。当時、活動していた学生が、「子どもが場にいることで、住民が和む」ことに着目したのである。吉里吉里地区では、1968年に現在の大槌町の中心部をつなぐ吉里吉里トンネルが開通したことにより、家庭内で方言が使われる場面も次第に少なくなっていった。お祖父さんやお祖母さんは「孫には方言を使わないで話す」ということもしばしばあると聞いた。こうした状況を受け、子どもが「カルタ遊び」を通して吉里吉里の方言に親しみ、それをもとに世代間の交流が促進されたらという思いも込めて学生が考案したものである。

2015年2月にできあがった『吉里吉里カルタ』を吉里吉里の住民と明学生が一堂に集まる「ありがとうを伝える会」でお披露目をしたところ、住民の方々は震災前の思い出を目を細めながら語り合っていた。カルタ遊びがはじまった途端に、「どこで買えるの?」と、次々と購入希望のリクエストをいただくこととなり、予想外ではあったが、増補版の制作を検討することとなった。あるご縁がきっかけになり、文化庁がおこなう「被災地の方言活性化事業」から助成を受けられることとなり、9月には吉里吉里地区の小学生、中学生全員への配布と住民への配布を進めることができた。また活動を応援して下さる学内外の皆さまや大槌町の多くの方に手に取っていただければという思いから、大学生協の購買や大槌町の書店の店頭で販売すること、明治学院サービスを通じて通信販売の環境を職員が中心となり準備し、整えることができた。

こうした『吉里吉里カルタ』で地域内の交流がもっと活性化できればと、吉里吉里の公民館長や小学校のPTAメンバーなどが話し合い、同じ版をつかって「ジャンボカルタ」制作の準備が進められた。PTA主催の新年の行事でそれを使ってカルタ大会がおこなわれるなど、地域に活用されるものになっている。

カルタ制作の背景は、震災で大きな被害を受けた住民間の関係を結んでいくということであった。お祖父さん、お祖母さん世代の方から吉里吉里で培ってきた思いや魅力を子どもたちに伝えていく、という伝承が続いていくようにという願いを込めた。その成果として、大槌町復興教育の「ふるさと科」の小学3年生の単元にて、この「吉里吉里カルタを使った方言学習」を取り入れていただけることになった。単元の構想や授業案の作成に学生も関わらせていただき、吉里吉里カルタをもとに「○×ゲーム」をおこなったり、カルタに出てくる昔から続く生活習慣について漁師として長年吉里吉里語を使ってきた方や郷土料理を作り続けている方をおたずねして、子どもたちが教えていただく場面も作っていった。

吉里吉里学園の中学部では、全校生徒と明学生とが参加して『カルタ大会』が開催された。この場に参加していた中学生は後日、このカルタについて以下のような感想を新聞記事（2015年8月31日の岩手日報）に寄せている。

「私の祖父や祖母の世代は方言を日常的に使っていますが、若い世代になるにつれ、方言を使う人は減ってきていると感じます。しかし、地域独自の言葉があるということはとても良いことです。ですから、方言を使う人が減るのはもったいないことだと思います。私自身もまだまだ知らない方言があるので、今回の授業をきっかけに、祖父や祖母と普通に方言を使って会話ができるようになりたいと考えています。」

復興には生活拠点といった物理的なものはもちろんのことだが、同時に地域のアイデンティティといった精神的なものも、とても大切であるということを、学生も教職員も改めて理解することとなった。このプロセスに関わったことは、一つの到達点であり、活動の成果と言えるかもしれない。



今後の活動に向けて

震災から時間が経過するにつれ、地域で顕在化している課題は震災前から生じていたものである場合も多い。そういった地域の深いところの課題に学生がどこまで、どのように関わっていくかについて、学生が悩む場面も多くあり、それについて議論も続いている。震災から時間が経過し、地域が変化する中で、変わらぬ理念を確認しつつも、柔軟に活動を変化させていく作業はこれからも続いていくだろう。

ボランティアセンターとしては、吉里吉里の皆さま、学生、そしてこの活動を支えてくださっている全ての関係者の皆さまとともに、これらの問いにどのように応えられるか、考えて続けていきたい。

(ボランティアコーディネーター 市川享子)

学生からの報告

本プログラムは2011年の震災直後より、岩手県大槌町吉里吉里地区にて復興支援活動を継続している。これまでに、502日、123チーム、延べ1,113名の学生が活動に参加した。本年は「第2回明学生からありがとうを伝える会」の開催をはじめ、地域における「過去の活動」を見つめ直し、「現在の活動」について再考する機会が多く存在した。盛り土工事や国道整備が本格化する現在、求められているボランティアとは何か。「地域に根付いた活動」を目指す中で、「学生だからできること」というワードが盛んに提起された。間もなく震災から5年が経過する。これまでの活動を振り返ることで、東日本大震災の教訓を生かすといった観点から、本活動の自己評価・外部評価等をまとめた冊子の作成も、方策の一環として進行している。以下は、各プロジェクトの報告である。 (学生メンバー 文学部英文学科)

<p>わんぱく広場</p> <p>私たちは、震災の影響で安全に遊べる場所を奪われた子どもたちに遊び場を提供する活動をしている。突然起こった大きな環境の変化により、子どもたちは多くのストレスを抱えているため、遊びは子どもたちにとって、重要な時間である。また、日々子どもたちの面倒をみている保護者へのレスパイトケアも目的としている。最近では、地域の方から子どもたちの学力向上を求める声が多い。そこで、今までのわんぱく広場に勉強の時間を設け、子どもたちの勉強する意欲を上げられるように努力を続けている。また、地域で開催する行事へのお手伝いをしてほしいという要望もある。2015年は、春に大槌町主催の「スプリングスクール」、夏には大槌町教育委員会主催の「サマースクール」などのお手伝いをさせていただいた。今後は地域から要望された行事に参加していきたい。また、復興を進めていく上で若い世代が重要になってくる。私たちだけでわんぱく広場や地域行事に参加するのではなく、地域の中学生、高校生など若い世代とも協力してやっていきたい。</p> <p style="text-align: right;">(学生メンバー 国際学部国際学科)</p>	<p>学習支援</p> <p>吉里吉里中学校は2015年の春から小中一貫校となり、吉里吉里学園中学部へと名称を改めた。我々の学習支援活動は継続し、勉強が苦手な生徒を対象にした「学習会活動」を12日間(3,6,8,11月)、学校生活に介入し1日をとともに過ごす「授業サポート活動」を9日間(2,9月)、の計21日間実施した。また4月に9年生(中学3年生)が修学旅行の一環として本学を訪問するイベントも、例年に引き続き開催された。そのほか新たな試みとして、アーカイブ化プロジェクトにて制作された「吉里吉里カルタ」を用いたカルタ大会を実施。また、交流という側面では、先生方のご厚意からお昼ご飯の時間に中学生と同じ給食をいただいた。勉強を教える、教えられるという関係を越えて、中学校全体との距離感がさらに縮まった一年であったと言える。本年は学習支援活動の開始から5年を迎える年となる。これまで本活動に携わってきたすべての方々の努力の上に現在の姿があることを強く意識し、中学生にとってより一層意味のある1日となり得るような活動を目指していきたい。</p> <p style="text-align: right;">(学生メンバー 文学部英文学科)</p>
--	--

<p>アーカイブ活動</p> <p>私たちは地域の歴史や文化を記録することで、住民の方々が地域への魅力を再確認し、復興の精神的な基盤になるのではないかという思いから活動している。今年は地域の伝統行事であるお祭りへの参加と、その参加体験を通して、15名の学生と2名の卒業生が祭りへ対する思いを記した文集「ありがとう ～吉里吉里の祭りに魅せられて～」を作成した。復興の原動力であるお祭りに練習や準備段階から参加することで、地域の方々のお祭りに対する情熱を間近で感じ、つながりをより深めることができた。また、活動中には「地域の力が戻ってきている」という生の声を聞いた。それにより、地域の復興の現状を学生も把握することができ、今後の活動への大きな影響を与えた。また、文集を作成した意図として、お祭りに参加させていただいたことへの感謝の気持ちを伝えるため、また、よりお祭りに対して誇りを持ってもらうことで地域の方々のエンパワメントにつながることを期待し作成した。今後も、活動を通してできたつながりを最大限に生かし、より深い関係性を築き、地域にさらに寄り添い活動していきたい。</p> <p>(学生メンバー 法学部法律学科)</p>	<p>吉里吉里カルタ</p> <p>昨年度30部制作した「吉里吉里カルタ」は地域の方々からご好評をいただき、1,000部の増刷をおこなうこととなった。増補版の制作に際しては、地域の方々とともに推敲をおこない、小中学生や地域の方々にカルタを配布した。今年度の夏活動では、吉里吉里学園小学部の「方言を学ぶ」という授業に参加した。授業では配布したカルタを用い、子どもたちに吉里吉里の方言や文化に興味をもってもらうことを目標とした。子どもたちが地域の方に方言についての質問をおこない、方言の意味だけではなく、あわせて地域の文化や昔話などもお聞きすることができた。これにより子どもたちは自分たちの町のことを知る良い機会となったと思われる。今回、カルタを通して子どもたちと地域の方との間で交流をおこなうことができた。今後もカルタを通じて地域の中での交流が増えていくことを望んでいる。</p> <p>(学生メンバー 経済学部経済学科)</p>
<p>スタディツアー</p> <p>今年度のスタディツアーは「震災発生当時の様子や大槌町が歩んできた復興の道のりを知ること」「今後私たち大学生に求められることを考え、身近に災害が起きた時に積極的に行動できるようになること」を目的として、6月6日～7日の日程で開催した。2日間を通して、私たち大学生と同世代の方や教育委員会の方、大槌町のまちづくりに</p>	<p>「第2回明学生からありがとうを伝える会」～「Do for Smile @東日本」プロジェクトを支えてくださったことに感謝をこめて～</p> <p>2015年2月11日、私たちは日ごろお世話になっている大槌・吉里吉里の方々に感謝をお伝えし、交流を深めるために当会を開催した。報告、交流、感謝をテーマに演目を設定。まず初めは活動報告を発表。2014年度私たちが活動してきたことを地</p>

<p>尽力されている方など、さまざまな立場の方々に としての「震災」と「復興」への思いを伺った。 お話を伺う中で、学生一人ひとりが自分自身を見 つめ直しながら、震災の恐ろしさ、備えの重要性 を再確認することができた。学生同士でのディス カッションでは、今後の復興に向けて私たちがで きることはどのようなことなのか、また自分自身 の住む地域で起こる震災に備えて実行することを 一人ひとり発表するなど、非常に充実した時間と なった。2016年で震災から5年が経過し風化させ ないために、今回参加してくれた多くの新規学生、 そして継続して支援している学生が大槌町吉里吉 里という地域の素晴らしさと復興への道のりを、 より多くの人々に伝えてゆく必要があると感じて いる。</p> <p>(学生メンバー 社会学部社会学科)</p>	<p>域の方とともに振り返り、次年度にむけての活動 への想いを伝えた。交流の演目では本活動が制作 した「吉里吉里カルタ」で遊んだ。この会がカル タ初披露となったため、感想に加え句に描かれて いる情景を懐かしく感じながらその句にまつわる エピソードをたくさん伺うことができた。小学生 もお年寄りの方も一緒に机を囲んで大いに盛り上 がった。会の終盤には、何度も大槌を訪れ、数多 くの活動に携わってきた4年生が地域の方へ感謝 を込めた手紙を読んだ。閉会後は学生が調理した 郷土料理「こまこま汁」と「木登り団子」を提供、 好評を頂戴した。活動5年目を迎える中、この活 動が多くの方々に支えていただいていることを改 めて強く感じる機会となった。今後も常に「感謝」 の気持ちを胸に、活動していきたい。</p> <p>(学生メンバー 文学部英文学科)</p>
--	--

以上が、今年度の活動報告である。現在、大槌町では盛り土工事など、目に見える復興が進んでいる。復興が予定より遅れているという事実がある一方で、「復興による変化に気持ちが追いつかない」という声もある。その中でどのような支援が必要とされているのかを学生が感じ、行動に移していきたい。現在は2年生が中心となり活動しているが、今後引き継いでいかなければならない1年生の継続メンバーが少ないため、新規生の獲得に力を入れることも必要である。さらに今後は、本活動を地域の若い世代へと引き継ぐ方法も模索していく。学生の力が求められている場面もある中、地域住民から、「地域の力が戻ってきている」との声もある。今後、地域とどのように関わっていくのかを見つめ直していきたい。

(学生メンバー 国際学部国際学科)